二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『イブリース外伝　堕天使と炎の女帝』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『イブリース　反逆の天使たち』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

イブリース
Jblis
外伝
堕天使と炎の女帝
高橋ショウ
表紙／渡瀬薫
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

イブリース（リオ）

神に反逆するため、一人の天才少女によって生み出された人造人間。

イブリースに変身し、異形の怪人バイオ･エンジェルから人間を護っている。

火神真姫（ひかみまき）

火焔を自在に操る少女。イブリースの相棒であり、恋人でもある。

黒牙（くろが）

ギラファノコギリクワガタ型のバイオ・エンジェル。

グジュ、グジュ、グジュジュッ……。

いくつもの店舗や雑居ビルなどが並ぶ通り。駅から近いこの場所は休日ともなれば多くの人でごった返す。平日の昼間でも、それなりの人通りはある。

「ぐぅ、あっ……ひぐぅ！」

彼女は、その通りの真ん中で犯されていた。水色の髪を長く伸ばした少女。ピッタリとフィットした黒いボディスーツの上に銀色のプロテクターを装着している。敵の攻撃から身を護ってくれる鎧は、あちこちが破損していた。

特に破損が激しいのは胸部だ。胸の部分は完全に破砕され、薄い布で覆われた乳房が飛び出ている。ボディスーツの下には何も身に着けておらず、豊かな乳房の頂を飾る小さな突起がツンっと浮き出ている。

いつもならキリッとした凛々しい表情を浮かべている顔は、悪魔や堕天使を連想させるデザインのバイザーで覆われていた。

グジュジュ、グジャ、グチュグチュ……。

「あひぃっ！　あっ、ああっ！」

今、彼女の顔に凛々しさはない。浮かんでいる表情は苦悶のものだ。

水色の髪の彼女はまるで犬のように、尻を高く掲げた格好で四つん這いにされていた。ただでさえピッタリとフィットしているスーツは腰を突き出した姿勢のせいで限界まで引

本シーン
えっ試し読み
ここからスタート

き伸ばされていて、下に隠された引き締まって上向いている尻の形をクッキリと浮き上がらせている。
四つん這いにされている彼女の後ろには、異形の怪人が膝立ちになっている。象と人間を掛け合わせた姿を持つ異形だ。
水色の髪の少女が着ているボディスーツの股間部は破られていて、象人間とでも呼ぶべき異形のペニスが押し込まれていた。
その姿に似つかわしい巨大なペニスに対し、彼女の女陰は遥かに小さい。淫唇は極限まで押し広げられていて、今にも裂けてしまいそうだ。
「あぐぅっ！　あっ！　あひいっ！」
象人間の巨根が、プロテクターの彼女———イブリースの秘洞を抉るたびに、グチョグチョ、グジュグジュという水音が繋がった部分から響く。
象の姿を持つ異形の先走り液と水色の髪の少女の牝蜜が混ざった雫が飛び散り、アスファルトの路面に点々と淫らなシミを広げていった。
「ぐっ……ぐぅっ！」
巨根の突き入れが生じさせる圧迫感を伴った衝撃に、イブリースの意識は遠くなる。しかし、
「おっと！　気絶なんかされちゃ困るぜ！」

彼女の前に立つカマキリ人間が、甲殻で覆われた手で頬を強く叩く。その痛みが、彼女に気絶することを許さない。

長い髪の少女の周囲にいるのは、象とカマキリの獣人だけではない。様々な姿の異形が犯されている彼女を囲んでいた。その数は確実に二十体近くいる。

そして、この場にいるのは異形だけではなかった。

通りにある店で買い物をしていたらしい人間の姿もある。

イブリースは異形たちの敵だ。異形はバイオ・エンジェルと呼ばれていた。神の使徒、人間を滅ぼす存在。

彼女はそれを倒すために生まれた、神に鉾を向けし堕天使なのだ。

長鼻の獣人の腰の動きが激しさを増す。

「ぐぅ……ひっ！　いぐぅっ！」

ビクビクと震えながらイブリースの背中が弓なりに反る。意識は異形に犯されることを拒み、そして嫌悪するが、身体は異なる反応を示してしまう。

異形のペニスが秘洞を出入りするたび、蜜で熱く濡れた秘肉はウネウネと蠢く。その蠢きは異形のペニスに快楽を与え、腰の動きをより激しくさせる結果となる。強烈な一突きを受けた瞬間、イブリースの中を快楽の津波が疾走した。彼女はバイザーに隠された目を大きく見開き、折れてしまったのかと思わせるほど背中を仰け反らせた。

「ああっ……あ……あああっ！」
震えながら喘ぐ水色髪の少女の股間から大量の蜜が噴き出し、アスファルトに淫らな水たまりを広げた。
「はぁ、ふぅ……」
望んでいない絶頂を迎えてしまった堕天使は、快楽の余韻でフルフルと震えながら脱力する。彼女と繋がったままの象人間は腰を前後に振り続けながら、嘲笑を浴びせ掛けた。
「この女、犯されてイッちまったぜ。いやらしいメスガキだ」
嘲り言葉を受け、虚ろな瞳で呆然となっていたイブリースはハッと我に返った。項垂れていた顔が上がり、震える瞳にニヤニヤした笑みを浮かべている異形たちと唖然とした顔の人間たちが映る。
「いや……」
ブルブルと震える唇から、ポツリと小さな声が漏れ出る。最初、小さかった声は「いやあああああっ！」という絶叫に変わり、通りに大きく響き渡った……。

神は人間を排除することにした。バイオ・エンジェルと呼ばれる使徒を使って人間という種を滅ぼそうとしたが、ある少女がそれを良しとせず、神の人間抹殺計画に反旗を翻した。
そのためにイブリースは生み出された。神の使徒バイオ・エンジェルから人間を護る…

…それが人造の堕天使であるイブリースの使命であった。

ネオ東京と呼ばれる人工の島でイブリースは戦っている。そして、その戦いの中で彼女は支えとなってくれる少女と出会った。

その少女の名前は火神真姫。炎を生み出し、自在に操る能力を持つ人間である。

「リオ！　すぐに来てくれ！」

ショートヘアに眼鏡、ジーンズのジャケットにミニスカートという姿の少女が携帯電話片手に走りながら叫ぶように言う。

「奴らが現れた！　場所は……」

人に植物や動物を掛け合わせた異形が少女の視線の先で暴れていた。

それこそが人間を滅ぼそうとしている神の尖兵バイオ・エンジェルだ。

通話を終えたショートヘアの少女は携帯電話を腰のホルダーに押し込むと、そのまま手を腰の後ろへと移動させる。

そこにはヒップホルスターが装着されていて、一挺の拳銃が収められていた。固定用のホックを外し、グリップを掴んで拳銃を引き抜く。

真紅のオートマチック・ピストル。初弾はすでに薬室に装填されている。トリガーセーフティ式なので、後はトリガーを引くだけで撃つことが出来る。

「きゃああっ！」
ザリガニ型のバイオ・エンジェルに迫られ、女子大生風の女性が悲鳴を響かせた。
ショートヘアの少女・火神真姫は、赤いゴツゴツした甲殻で全身が覆われた怪物に銃口を向け、連続してトリガーを引いた。銃声と共に放たれた四十五口径の弾丸が、怪物の甲殻にメリ込んだ。
「おわっ⁉」
バイオ・エンジェルは衝撃で体勢を崩す。真姫はすかさず肩から体当たりして異形の天使を弾き飛ばした。
「逃げろ！」
異形の天使に襲われそうになっていた女性に向かって叫ぶ。真姫の声に押されるようにして、その女性は走り出した。
狩りの邪魔をされたことを怒り、赤い異形の天使は雄叫びを轟かせて真姫に襲い掛かった。
「はぁっ！」
気合いを発し、真姫は左腕を振る。すると、紅蓮の火焔が彼女の腕から放射された。
「ぐぎゃああっ！」
高温の火焔に包まれ、バイオ・エンジェルは瞬時に黒焦げとなって絶命する。

「こいつは！　イブリースの仲間だっ！」
真姫の存在に気付いた異形たちが、彼女を取り囲む。
多数の異形に囲まれても、真姫は恐れも焦りも抱かない。眼鏡の奥の瞳は、強い意志と鋭い光で輝いている。そこに不安などはない。
異形たちは一斉に火焔を操る少女に襲い掛かる。真姫は焦らず、意識を集中させた。すると彼女の周囲に火焔の柱が何本も立った。
悲鳴を上げる暇もなく、真姫に襲い掛かったバイオ・エンジェル全てが灰も残さず焼滅した。
異形の天使はまだ何体もいる。他の場所に移動しようとする真姫の側に、一台のバイクが停止した。
「真姫、お待たせ！」
ハードブラックのシェードを外し、ライダーはバイクから降りた。真姫よりも背が低い、水色の髪の男の子みたいな顔立ちの少女。名前はリオという。
真姫を見つめる彼女の瞳は、金色に光っていた。
「リオ、奴らの数は多い。二手に分かれよう」
「うん。通信機は？」
「ちゃんと持っている」

と真姫はスカートのポケットからイヤホンと一体化されているマイクを出してリオに見せた。それを彼女の前で耳に填め込む。
「何かあったら、すぐに報せて」
「ああ。そっちも気を付けろよ、リオ」
「うん」
二人の少女はそれぞれ別の方向に向かって走った。
走りながらリオは開襟シャツのボタンを外し、真っ平らに近い胸が露わとなる。
胸の皮膚と肉を割り、何かが顔を覗かせた。それは不思議な輝きを放つクリスタルだ。
そのクリスタルから大量のナノマシンが放たれ、リオの肉体を変化させた。
短かった髪が長くなりバサァッと広がる。次いで顔の輪郭がシャープになっていく。目つきも鋭くなり、リオの時は可愛いと感じさせる顔だったが、イブリースの顔は鋭く凛々しさを感じさせるものだ。
ピンク色で薄かった唇は、肉感的になって妖艶さを感じさせる真紅に染まる。
顔の次は身体が変化する。男の子のような体型が、一瞬にして成長した女のものになった。
膨らみが感じられず少しも揺れることがなかった胸は、一歩足を踏み出すたびにユサユサと弾むほどに膨らんだ。
彼女が手足を動かすたびに、たわわに実った乳房は内回りの円を描いてブルルンッ！

と派手に揺れる。

それだけではなく、ナノマシンは黒いボディスーツとなって全身を覆う。そのスーツは彼女の肢体にピッタリとフィットしており、乳房の見事な稜線と豊かさ、引き締まって吊られているように上向いている尻のラインがハッキリと浮き出ている。

ツンッと上を向いている小さな乳首が薄い布地を押し上げ、股間の少女の証である一本の縦筋もクッキリと浮かび上がっているのが見えた。

テカテカした光を放つ黒いボディスーツの要所要所を銀色のプロテクターが覆い、彼女の身を護る。男の視線を釘付けにすること間違いなしの乳房も装甲で覆われた。装甲は乳房をカッチリと固定し揺れるのを防いでくれるので、戦いの邪魔になることはない。

顔の上半分は悪魔的なデザインのバイザーで覆われ、腰の左右と後ろには武器を収めたホルスターが装着された。

僅かな時間で、少女リオは人間の守護者イブリースとなった。

人造の少女は走りながら右のホルスターから拳銃を引き抜く。大口径でシングルアクション式の五連発リボルバー、《射抜く牙（シューティング・ファング）》。グリップの底はハンマーのように鋭く尖っていて、バレルウェイトには両刃のナイフが仕込まれている。

射撃戦だけではなく、格闘戦にも使える武器だ。

それを構え、撃鉄を起こす。撃鉄もトリガーも重いが、スーツとプロテクターの機能で

筋力が強化されている彼女には軽く感じられた。
轟音と共に放たれた大口径の炸裂弾が、山羊の異形天使の頭を吹き飛ばす。さらに、もう一発撃つ。今度は山羊の隣にいたガゼル型のバイオ・エンジェルの頭が消し飛んだ。
《射抜く牙》の弾丸が、次々とバイオ・エンジェルを葬っていく。
「奴だ！　イブリースが現れたぞ！」
異形天使は敵の存在に気付き、人間を襲うのをやめて、彼女を標的とした。
「何体でも掛かってこい！　まとめて葬ってやる！」
左手で腰の後ろのホルスターから真紅のオートマチック・ピストルを抜いたイブリースは、二挺の拳銃を構えて声高らかに宣言する。
街は瞬く間のうちに怒声と銃声が轟く戦場と化した。
かなりの数のバイオ・エンジェルが街に放たれたようだ。イブリースは十体以上を葬ったが、街からはまだ異形天使の気配は消えていなかった。
走りながら《射抜く牙》の弾丸を装填し、彼女はバイザーに内蔵されている通信装置のスイッチをオンにして相棒である真姫に通信を入れる。
「真姫、そっちの調子はどう？　加勢は必要？」
だが、真姫からの返答はない。
いま戦闘中で手が離せないのかと思い暫く待つが、いつまで経っても彼女からの返答は

なかった。
「真姫？　どうしたの真姫⁉」
何かあったのかと焦るイブリースの耳に、聞き慣れない男の声が届いた。
『よう、イブリースかい？』
「っ⁉」
イブリースは足を止め、誰だ？　と問う。真姫の身に何かがあったのだと思い、声が震えてしまいそうだった。
『くっく……バイオ・エンジェルに決まっているだろう？』
通信機の向こうで通信相手はおかしそうに笑う。間違いなく真姫の身に何かが起きたのだと確信したイブリースは、心臓の鼓動が速くなって呼吸が荒くなるのを意識する。
「ま、真姫はどうした……？」
自分に落ち着けと言い聞かせながら、人造の堕天使はバイザーの機能を発動させた。
バイザーの内側に街の地図が投影され、一部に赤い光点が表示される。真姫の通信機の在り処を示す点だ。
『火焔使いの小娘か。こういう場合、パターンは決まっていると思わないか？』
言葉の端々に笑いを含ませながら、顔の見えない相手は小馬鹿にしたような口調で言う。
『まずは定番の台詞……仲間の命が惜しければ、言うことに従え、だ。こいつにはＧＰＳ

機能があるようだな。なら場所は分かるな。ここまで来い』
言われるまでもなかった。バイオ・エンジェルに言われる前に、すでに彼女は走り出していた。
真姫は単に戦いの相棒という存在ではない。
精神面で弱い部分があるイブリースの支えであり、そして大切な恋人である。
何があっても、護りたい少女だ。
バイザーに表示された場所に着く。そこは、いくつもの店舗や雑居ビルが並ぶ通りだ。
避難したのか、人の姿は見当たらない。
「真姫っ！」
堕天使の金色の瞳に映るのは、両手首を頭上で一つに縛られてビルの屋上から吊るされている真姫の姿であった。目を閉じてピクリとも動かないでいるが、胸が上下に動いているのが見えたので、気絶しているだけだとホッとする。
そのビルに向かおうとするイブリースの前に、人影が立ちはだかった。
全身を黒い甲殻で覆い、大きなハサミ状の顎を持つバイオ・エンジェル……ギラファノコギリクワガタの姿を持つ異形天使だ。手下なのだろうか、背後にはカマキリと象のバイオ・エンジェルが控えている。
「早かったなイブリース。お初にお目に掛かる、俺は黒牙だ」

黒牙と名乗った異形天使の声は、真姫の通信機から聞こえた男のものであった。鉤爪が生えた指には、彼女が耳に填めていたイヤホンと一体化されているマイクという形状の通信機が握られているので間違いなかった。

「さて、またお決まりのパターンだ」

グシャっと通信機を指先で握り潰した黒牙は、真姫が吊るされているビルを指し示す。屋上にカナブンの姿の異形がいた。鋭い鉤爪は、真姫を吊るしているロープに引っ掛かっている。

「武器を捨てろ。でないと、ロープを切る。ビルの高さは、ざっと二十メートル。落ちれば確実に死ぬ高さだぜ」

通信機で語った時と同じように、言葉の端々に笑いを含めて黒牙は言う。表情など浮かばないように思える黒い甲殻で覆われた顔に、ニヤニヤした笑いの形が浮かぶ。

「わ、分かった！　言う通りにする！」

真姫の命を護るためと、イブリースは黒牙の要求に素直に従う。従うしか選択肢がなかった。

「そうそう、素直が一番だぜ。俺が次に言う台詞、分かるよな？」

黒牙の言葉に含まれる笑いが強まる。

水色髪の堕天使は悔しさで歯噛みした。

「て、抵抗しない……それで、いいんだろう？」
「正解だ。よく出来ました」
黒牙は肩を揺らし、大きなハサミをガチャガチャと鳴らしながらゲラゲラと笑う。
他のバイオ・エンジェルたちも、彼に釣られるようにして笑い声を響かせた。
屈辱感がイブリースを覆い、身体が小刻みに震える。
だが、真姫を人質にとられていては何も出来ない。
悔しいが敵の言葉に従うしかなかった。
黒牙は背後に控えている二人の部下に「やれ」と命令する。
手の甲から鎌状の器官を生やしたカマキリ型と長い鼻と鋭い牙を持つ象型のバイオ・エンジェルが、心得たとばかりに無抵抗を決め込んだ少女へと歩み寄っていく。
過去の戦いの経験から敵が自分に何をしようとするのかが分かり、イブリースの顔がひきつった。
彼女の背後に回ったカマキリ型が、動けないように羽交い締めにする。
顔を青ざめさせる堕天使の恐怖を煽るように、前に立った象型は長い鼻をバイザーの上に巻いて彼女の視界を奪う。そして跪くとボディスーツの股間部を掴み、左右に強く引っ張った。
彼女の秘められし箇所を護る布は伸縮性に優れてはいるが、限界を超えた負荷に耐えき

れず絹裂けの音を立てて綻んでいく。
象型は下卑た笑いを浮かべながら、わざとゆっくりとボディスーツを裂いた。ビリ、ビリリ……と黒い布は少しずつ裂け目が大きくなっていく。
そして、
「ああっ！」
悲鳴と一緒に、ついにボディスーツの股間部は完全に引き裂かれてしまった。
髪の毛と同じ水色の陰毛で飾られた少女のスリットが露わとなり、象型異形天使の眼前に晒される。
恋人以外に見られたくない箇所に不躾な視線を感じたイブリースは、顔を羞恥で真っ赤に染めた。
「こいつは驚きだ。随分と可愛らしいオマ〇コだな。俺らの同胞を葬ってきた凶悪女のものとは思えないぜ、こりゃ」
「う、うぅ……」
欲望に満ちた無遠慮な視線を向けられているだけではなく、慇懃な口調で己自身を揶揄されて、人造少女の顔はますます赤くなる。
皮肉が込められた批評の通り、彼女の女性器は綺麗で愛らしいイメージがあった。
恥丘の盛り上がりは小さく、殆ど膨らみが感じられない。清楚な佇まいの性器を飾る水

色の陰毛は薄く、スリットが隠れておらず、透けて見えている。秘めやかなる肉花園の肉付きは薄く、とても儚げであった。

「おい、ザガリ。その可愛らしいオマ〇コを可愛がってやれ」

黒牙からザガリと呼ばれた象型バイオ・エンジェルは「はっ！」と返事をすると、剥き出された堕天使の股間へと顔を寄せていった。

「ひぃっ！」

空気が抜けるような悲鳴を上げ、イブリースはビクンッと身体を跳ねさせる。

薄く翳った陰毛で覆われたスリットに、ザラザラした舌が触れていた。

ベチャベチャ、ベチャベチャ……とわざと大きな音を立て、象の異形天使は堕天使の秘裂に舌を這わせる。

「く、くぅ……はっ、んく……」

舌が敏感なスリットを這うたび、彼女はフルフルと身体を震わせながら喘いでしまう。

「何だ？　感じているのか？」

獣欲剥き出しの言葉をイブリースは「感じてなんかいない！」と否定する。

感じていないことを強調するように、顔を真っ赤に染めた人造の堕天使は、声を漏らすまいと歯を食い縛った。そんな抵抗を嘲笑うように、カマキリ型は片腕を離して彼女のキュッと上を向いている尻を撫で回して……、

「はぁうっ！」
堕天使はバイザーの奥で目を見開き、尻をビクンッと跳ね上がらせた。
声を出すまいと思っていたが、抑えきれず唇からは嬌声が漏れ出てしまう。
尻をねちっこく撫でていたカマキリ型の手……人差し指が、布の上から尻孔をギュウッと強く押していた。
「へっへ、尻の孔を弄られて気持ちいいみたいだな」
言いながらバイオ・エンジェルはギュッギュッと連続してアナルを押した。
「う、あ、あぁ……はぁ、うっ……」
スリットを舐められ、尻孔を押され、イブリースは押さえ付けられている身体を小刻みに痙攣させて喘ぐ。膝はガクガクと震えて力が抜けていき、今にも崩れてしまいそうだ。
尖った異形の指の先で布の上から押されているアナルは、まるで物欲しそうにヒクヒクと蠢く。
「くぅっ……」
唇の端を噛んで、痛みで快楽を消そうとするが、身体はその意思に従ってくれない。徐々に徐々に、快楽が浸透していく。
やがて、彼女の股間はザガリの唾液以外のもので濡れだしていく。
白っぽくも見えるし透明にも見える、微かに泡立つ液体。スリットの奥からトロトロと

零れるそれは、水色髪の少女が快感を得てしまっている証……彼女自身が零す、女の蜜だった。

「可愛いここを、もっと可愛くしてやるぜ」

堕天使のスリットと蜜を充分に堪能したザガリは、股間から顔を上げて言った。イブリースには異形天使が自分に何をしようとするのか理解できず、歯をカタカタと鳴らしてしまう。

ザガリが彼女の身体を押さえ付け、カマキリ型の異形天使が足元に跪き、鎌が生えた手を股間へと寄せる。

「っ⁉」

股間に生体パーツの鎌が触れ、イブリースは身をすくませる。

象の鼻で視界を奪われている人造堕天使には己の股間に何が触れているのか見ることが出来ず、恐怖感が増していく。

「けっけ、動くなよ。怪我するぜ」

カマキリ型の声が聞こえた直後、ジョリッ……という音が堕天使の耳に届いた。それは切られるのとも、毟られるのとも異なる、奇妙な感じがする音だ。

見えなくても股間から伝わる感触と音で何をされているのか理解できた。

陰毛を剃り落とされているのだ。

唾液と牝の蜜を潤滑油として、カマキリの異形天使シクルは鎌で彼女の陰毛を剃る。
「ひ、や……やあぁぁっ！」
痛みはない。
ただ恥じらいでイブリースは叫んでいた。
その間にも、剃毛の作業は進む。ジョリジョリと容赦なく、慎ましい秘園を飾る毛が剃り落とされていく。
暴れて抵抗したかったが、脳裏に真姫の姿が浮かび上がり、堕天使は剃毛を受け入れるしかなかった。
彼女が抵抗できないと知る異形天使はゆっくりと、わざと大きな音を立てて水色の柔毛を剃っていく。
一本も残さないという勢いで、鎌が堕天使の股間を滑る。
やがてシクルの手の動きが止まった。
「可愛くなったぜ」
陰毛は一本も残されておらず、人造堕天使のスリットは完全に丸見えだ。
羞恥の涙が視界を隠す長鼻の隙間から零れて、赤く染まった頬を濡らす。剃毛を終えたシクルが、再び背後から堕天使を押さえる。
「じゃあ、今度は……この可愛くなったオマ〇コに俺様のモノを突っ込んでやるぜ」

震える両足がザガリに掴まれ、持ち上げられた。
「わっ⁉」
背後からシクルに押さえ付けられたままなので、イブリースは空中で横にされたような格好となる。
大きく開かれた両足の間に、ザガリが入り込む。
水色髪の少女には見えないが、彼女の足を脇に抱えている象型異形天使の股間には、野太い肉の凶器が隆々とそそり立っていた。
その先端が、剃毛されてツルツルになった女の亀裂に触れる。
ザガリのペニスは巨根と呼ぶに相応しい大きさで、イブリースが受け入れられるようには見えない。
巨根の亀頭部が膣口に軽く押し当てられただけで、ヌチッという粘っこい音が響いた。
視界が奪われていても、感触と気配で異形天使のペニスの巨大さが分かり、人造堕天使の顔のひきつりが強まった。
裂けてしまうのではないかという恐怖が彼女の精神を満たし、身体がガタガタと震えた。
ザガリの腰がグイッと押し込まれる。肉の凶器が、少女の膣道を奥まで一気に貫いた。
「がぁっ！　……あっ、ぅあぁっ！」
巨根が、みっちりと肉秘洞を埋める。

圧倒的な圧迫感が人造の堕天使を襲う。彼女は呼吸を詰まらせ、涙を撒き散らして苦しむ。
「きひ、んぐぁあっっっ！」
長鼻の獣人はそんな堕天使の様子を楽しげに眺めながら、無遠慮に腰を前後させてガンガンと責め立てる。
「いぎっ、ぐぅ……いぐぅっ！」
イブリースがいくら苦しみ悶え嫌悪しても、身体は彼女の意思を無視して勝手に反応してしまう。
濡れた秘肉は埋め込まれた肉茎を食い千切ろうとするようにグイグイと締め付ける。
奥は奥で受け入れた先端を優しく包み込んでしまう。ギュッと柔らかい掌で挟み込んで、そのままギュウギュウと搾り取ろうとするような動き……男にとって、これ以上ない極上の甘美を堕天使の肉体はザガリに与えてしまう。
しかし、それでも異形天使はジッと動かずにその感触を堪能するよりも、積極的にガシガシと動いてイブリースを責め立てた。
グジュグジュ、グジャ、グジュジュ……。
「ひきっ、ぃうっ……あひぃっ！」
激しい腰使いで奥まで抉られ、人造の堕天使は失神寸前だ。
グジュッグジュッ、グジュングジュンッ……。

ザガリの腰使いが激しさを増す。グチョグチョという粘っこい水音がイブリースの喘ぎ声と共に響き、異形天使の先走り液と牝蜜が混ざったものが雫となって飛び散る。彼女の股間周りは汗や溢れた愛液でベトベトだ。

「はぁっ、あぁっ、ん……くぅっ！」

異形天使の腰の動きが速くなり、激しさを増していくと、それに釣られるようにして肉凶器で貫かれている堕天使の肢体がガクガクと震えだす。

長鼻で覆われて真っ暗になっている視界に、虹が見えた気がした。快楽の虹……最初、薄く見えたそれは次第に濃さを増していく。

「いあっ、んひぃ……ひぃう、くあぁ……」

ダラダラ、ダラダラとだらしなく唾液を唇の端から零して喘ぐイブリースの肉洞が、ウネウネと妖しく蠢いてペニスを扱く。

まるで、射精を促すような蠢きだ。

堕天使の中で、巨根がビクビクと脈動を始める。

「中にたっぷりと出してやるぜ」

異形天使のその言葉に、呆けていた少女の意識がハッと甦った。

「よ、よせっ！　や、やめろぉっ！　な、中で出すなあぁっ！」

中出しされる恐怖でジタバタと暴れるが、その程度で肉洞からザガリのモノが抜けるこ

とはない。
「もう遅いぜ！」
一度腰をグィィっと大きく引き、ズドォォンっと一気に根元まで打ち込む。その瞬間、極太のペニスが大きく脈動した。
「い、いやああああっ！」
イブリースの絶叫と同時にビュクッビュクウッと音を響かせて、欲望の熱い奔流が叩き込まれた。灼熱の欲望液が己の中を満たすのを感じ、
「いやあっ！　いやだあああぁぁっ！」
人造の堕天使は絶叫を轟かせた。
ペニスが抜かれると、白濁した欲望液がドブドブと音を立てて人造堕天使の淫裂から溢れていく。イブリースに絶叫を上げさせた異形天使の欲望液が、太腿や下腹を白く汚していく。
「う、うぅ……あぁ……」
秘洞の中で射精され、汚されたことを嘆くイブリースの唇からは、意味を成さない言葉が漏れ出るだけだ。
ザガリの股間にそそり立つモノは、かなりの量を放出したというのに、いまだ力を失ってはいない。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/